

## 学会長退任挨拶

このたびBMFSAの第9期会長の2年間の任期を終え退任させて頂くことになりました。2年間は長かったような短かったような複雑な気持ちですがホッとしています。和多田事務局長、中野副会長、斉藤副会長、山下理事はじめ多くの方々のご支援があったからこそ、会長の仕事が何とか務まったのです。私を支えて下さった皆様に心から御礼申し上げます。

この2年間には色々なことがありました。私のミスもあり命名された「創立20周年記念大会」では、大会長を努めて頂いた水本先生が特別の予算を計上して下さい、マルセイユ大学のエリエ・サンシェズ先生ご夫妻に参加頂くことができました。「怪我の巧妙」と言うのは言い過ぎでしょうか？英文学会誌の大幅遅延の大問題は私の任期中に発生しました。編集委員長を支えることのできなかつた「チームワークの欠如」と非難されても弁解はできないと深く反省しています。

当学会は「長い曲がり角」に来ているといわれますが、今後の活動の礎になればと、私の任期中に解決できなかった問題点を改めてここに列挙します。

1. 会員数の減少
2. 会員の西高東低の偏り
3. ファジィ関連演題の減少

これらを解決する策の名案はなかなか見出せませんが、当学会の魅力をこつこつと積み上げることが重要と思います。当学会の魅力をどうアピールするかがポイントですが「ファジィブーム」が去った今は「新しい目玉」を見つける必要があると思います。

年次大会の開催予定を関連学会の学会誌やホームページに着実に掲載することなど「宣伝活動」も重要と思います。

当学会の発展に最も重要なのは「発表研究論文の質の維持向上」だと思います。査読者の先生は大変だと思いますが、「レフェリー付き論文」のレベルの高さが良循環を生んで、論文投稿数も増えると思います。当学会は当面は「量より質」をモットーにファジィ科学の発展に寄与すべきかと思えます。

社会全体を眺めると、いわゆるファジィ技術は、制御(control)の領域では数々の実用的システムに貢献していますが、判断(decision making)の領域では実用的システムが定着するには至っていないと思います。したがって医療(の診断領域)の論文数や会員数が減少してきているのだと思います。

学会運営上の問題として、総会が年次大会開催中に開催される関係上「決算報告書には前年の年次大会の決算額が、次年度予算案には当年度の予想額が記されているに留まり、次年度の年次大会の予算額が不明確」である問題を改めて指摘しておきたいと思います。何か良い知恵はないでしょうか？

選挙の結果、私は「顧問」を拝命しましたので、今後は学会運営全般に対する提言・助言等に微力を尽したいと思えます。

新進気鋭の中野会長にバトンタッチできることに「確かな手ごたえ」を感じています。

2007年3月

第9期学会長 柴田定康